第十三回兵法講座 ― 楠流兵法と武士道精神

平成二十五年十月十三日（於　靖国会館）

太平記秘伝理尽鈔巻第六　楠天王寺に出張の事付隅田・高橋並宇都宮事

楠木正成の主要な合戦と渡辺橋・天王寺の戦い

『太平記』には、どう書かれているか

楠木正成が天王寺に進出した時期に二説あり

【下赤坂城奪回作戦の概要】

楠木、赤坂城を攻撃

湯浅の兵糧隊を襲撃

【渡辺橋の戦い】

概要　参照『名将に学ぶ世界の戦術』

楠、渡辺の橋より南に陣を取る事。

盲の敵を引く

楠木が当初予想した敵の侵攻様相（六～七万の大軍勢）

大軍には「鳥雲の陣」

『いわゆる鳥雲とは、鳥のごとく散じて雲のごとく合い、変化窮りなきものなり』六韜

堀と強弓の備え

足軽と騎馬

楠木が当初考えていた作戦構想

類似の戦例「ダラの戦い」（名将に学ぶ世界の戦術　一六六頁）

隅田・高橋、河内へ向かうに付いて

隅田・高橋派遣は拙策

楠木の布陣・作戦は賢策

楠木退治の軍勢

京勢、河向かひに引へたる楠が三百余騎を見るに、敵の分際左こそと欺ひて、七千余騎河を渡す事。

京勢の不覚

楠が勢三百余騎、遠矢少々射捨てて、天王寺の方へ引退く。京勢追ふ事一里也。

良将は小勢を以て大勢とす

渡河追撃の戦法

楠木、三つに兵を分けたる事。

楠木が兵を三軍に分けた意図

『敵の意を量って、軍(いくさ)に勝つ』

奥の奥を謀った楠木

隅田・高橋、天王寺・住吉の勢を見て、引退きし事。

隅田等は無知で臆病

勇も無く、謀も無い ＝ 愚将

良将と位

凡そ良将は、寄せたる日は、位を見るとて、左右無く敵にかからず候

敵陣を攻める段階

「備」と「屯」

退却時の心得

二軍が引くべき、いくつかの状況（六波羅軍が執りうる三つの行動）
その一、敵軍を追ってから引く
その二、川を越えることなく、敵を偵察
その三、備えを乱さずに天王寺まで追う
隠し勢の用い方
正成の隠し勢は迅速
過ぎし五月十九日、正成、軍の法を出して云、（楠木の指揮）
川端の三百余騎／天王寺に置く和田孫三郎の一千余騎
渡辺橋手前の軍使（伝令）／天王寺の軍使
自分の手元に置く軍使／住吉の八百余騎
其日馬を乗り替ゆる事七疋とも。

【天王寺の戦い】

宇都宮一人河内へ向へと下知せらるる事。
宇都宮派遣は愚策
卵を以て、岩を破らんと欲するに同じ
宇都宮辞退の気色なく、一命を渡辺に捨んと思ひ切つて向かひし事。
宇都宮は血気の勇者
三つの勇者
生得の勇者、血気の勇者、仁義の勇者
宿所へも帰らず、直に六波羅より、わづか郎従十四、五騎にて下りし事。
宇都宮の出陣
軍の評議もせず、早速に出陣
途上で放火、略奪
和田孫三郎、正成に申し様の事。
楠木、負けの勝ちを選ぶ
「敵を蒸す」戦法
良将は世愚の言を用いず
名医の前には、薬とならない草木は無い。また、毒ではない草木も無い。
始終の勝
戦とは最終的に勝つことこそが良い
宇都宮の智勇
宇都宮の小勢と、楠木の大勢とが互角の戦いになるおそれ
両虎の戦い（大将同士の戦い）
魚鱗と鶴翼
宇都宮・探題は闇主
正成所々の嶺々に篝を焼く事。
楠木の篝火作戦
宇都宮の撤退
楠木が追撃をしなかった理由
軍者敵の気を深く見るが第一にて候。
凡そ将の軍を引退く時、合戦を意に懸けぬれば、あやまちはなき者に候。
常に、先の先を考えていた楠木正成

【楠木正成が天王寺に進出した時期】

定説と『太平記』記述の違いについて
どちらが合理的か？